◆ 巻頭言

白い画用紙

きむら　ゆういち

心の中の画用紙が真っ白なころは、誰でもこうだったに違いない。

みんなに愛されて、みんなを愛せる人でありたい。

みんなによい人に見られたい。

みんなにほめられるためなら苦労も厭わない。

幸せな日々を送りたいし、他人の幸せも願える自分でありたい。

誰でも初めからほめられたくない人などいないはずだ。

でも、画用紙にはいろんな絵が描かれていく。色が混ざりあい、きれいな色が生まれる場所もあるし、濁った色になる場所もある。時には優越感に浸り、自慢し、人を蔑み、または羨み、妬み、そして争う気持も生まれてくる。

ボクの童話作品の『あらしのよるに』は、真っ暗でお互い声だけしかわからない場面から始まる。わからないから相手に対して先入観の部分は真っ白な画用紙のようなものである。

そして嵐の夜と暗闇と一人ぼっちの不安から、相手の存在を求めあい会話していく。そんな状態だったら、たとえ相手が天敵であろうと心が通じるのだろう、というお話である。

これを人間に例えれば、敵国の相手との話、民族の違う相手との話、階級の違う相手、貧富の違い、近所の大嫌いなおばさん同士の話、禁じられた恋の話等々、読む人の取り方はさまざまだ。

ただ一つ言えるのは、先入観の部分だけでも真っ白にしてつきあってみたら、もともと持っていたきれい色でつきあえるのかもしれないということだ。先入観に更なる先入観を重ねてお互いの戦力を強化していく先には、破滅しか待っていない。

世界中の人間の一人ひとりは、初めはみんないい人で愛される人になりたいと思っていたはずなのだから。

PROFILE

きむら ゆういち

東京都生まれ。造形教育の指導、テレビ幼児番組のアイディアブレーンなどを経て、絵本・童話作家に。代表作は『あらしのよるに』(講談社)。絵本の他、戯曲やコミックの原作・小説などの分野でも活躍中。著書は500冊以上にのぼり、数々のロングセラーは国内外の子どもたちに読み継がれている。